フォーゼマギカ

バース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
フォーゼマギカ

【Ｎコード】
Ｎ９８４０Ｘ

【作者名】
バース

【あらすじ】
鹿目まどかが『ワルプルギスの夜』を倒し、全ての魔女を消し去ってから3年後…天の川学園高校二年生になった暁美ほむらのクラスに、あの男が転入してきた。
「俺は如月弦太朗！！この学校の連中全員と友達になる男だ！！」
彼の発足した『仮面ライダー部』と共に、ゾディアーツ、そして『魔獣』との戦いに身を置くほむら。

そして、彼女の出した結論は…？

これは、如月弦太朗と暁美ほむら、そして仮面ライダー部と魔法少女達が繰り広げるハイスクールストーリーである。

宇宙キターーーーーー！！！！！！！！！！

第０話　私の最初で最後の友達（前書き）

第0話　私の最初で最後の友達

「はーい、今日はみんなに転校生を紹介しまーす！」

それが、この日クラス担任の先生が朝一番で発した言葉だった。
転校生……それは一年に一回…いや、学校生活三年間の間に一回あるかないかのビッグイベント。
当然その言葉に誰しもが心躍らせ、いち早くグループに取り入れようとするはず。
ゆっくりと扉が開かれ…そこから噂の転校生が姿を見せた。

「あ……あの…私…あの…、あ、暁美…ほ、ほむらと言います…。よ、よろしくお願いします！」

三つ編みの綺麗な長い髪に、大きなメガネをかけた気弱そうな少女。
暁美ほむらと名乗るその少女は少し前まで心臓の病気でずっと入院をしていた。
つい先日その病気が治り、いつでも通っていた病院に行けるよう、そこから最も近いこの学校に転校してきたのだ。
内気そうな彼女は、休み時間になってもやはり、皆とは溶け込めず、質問攻めにあっても『その…』とか『えっと…』しか言わず。
これでは皆をがっかりさせてしまう……そう思い、シュンとした時だった。

「ごめんね皆、暁美さん…休み時間は保健室でお薬飲まなきゃいけないの。」

「ふぇ…？」
突然、ほむらにそう言って笑いかけてきた少女が一人。
どうやらこのクラスの保健委員らしく、『保健室の場所わかる？』と聞いてきてくれると彼女の手を取り、教室の外へと連れ出してくれた。
保健室に行きながら、その子はアハハと笑いほむらに頭を下げる。
「ごめんね暁美さん、みんな転校生なんて珍しいからはしゃいじゃって。」
「ううん…ありがとう…ご、ございます…。」
「アハハ、いいよ緊張しなくて！クラスメイトなんだから。あたし鹿目まどか！『まどか』って呼んで！あたしも暁美さんの事、『ほむらちゃん』って呼んでもいいかな？」
「えっ！？」
驚いた。
今までこんな変な名前…呼んでくれる人なんて家族か病院の先生達ぐらいしかいなかった…。
いや、そもそも転校生という事を除いてもこんなに親しげに話しかけてくれる人なんていなかった。
「で、でも変な名前だし…あんまり、名前で呼ばれた事ないし…。」
「そんな事ないよ！あたしはかっこいい名前だなぁって思うよ！」
「名前負けしてます……。」
「そうかな…？あ、だったらさ！」
「？」

「ほむらちゃんもかっこよくなっちゃえば良いんだよ！！」

本当に嬉しかった。
この言葉に、一体どれほど元気づけられたかわからない。
自分はかっこよくなれない……最初はそう思った。
そう、あの時までは……、

『魔女』に襲われるまでは…。

『魔女』……それは、絶望を振りまく災厄の種。
周囲に結界を張り巡らし、獲物を捕らえては殺す。
よく童話に出てくるような老婆の様な姿ではなく、人の形である事もあればモンスターの形をしている時もあるし、無機物の様な形をしている事もある。
狙われたら最後、死ぬしかない。
こんな形で死ぬなんて……絶望したほむらを救ったのは一筋の光。

「大丈夫ほむらちゃん！」

「……鹿目さん……？」
それは、ピンク色の衣装を身に纏い、弓矢を構えるクラスメイトの姿。

その隣には廊下ですれ違った事がある様な無い様な…とりあえず上級生っぽい少女が立っており、マスケット銃両手に黄色い衣装を纏っている。
何が起きたのか理解ができないほむらの隣に、白い猫の様な生き物が寄ってきて彼女に教える。

「彼女達は『魔法少女』！魔女を狩る者達さ！」

「あ、あなたは…？」
「僕はキュゥべぇ！よろしくね暁美ほむら！」
「いきなり正体がばれちゃったねほむらちゃん…クラスの皆には内緒だよ？」

それが、鹿目まどかとの『最初の出会い』

以降、ほむらはまどかと、まどかの魔法少女の先輩である巴マミと共に魔女との戦いを手伝う事になる。
とはいっても彼女自身は魔法少女にはならず、戦いを傍で見ているだけ。
魔法少女とは少女達の祈りをキュゥべぇこと『インキュベーダー』に叶えてもらい、その代償として魂を『ソウルジェム』と呼ばれる宝石に宿し、魔女を倒すために戦う戦士の総称。
魔女達の落とす『グリーフシード』と呼ばれる宝石を集める事で、魔法少女達はさらに力をつけていく事が出来るのと同時に、消費した魔力（穢れ）を取り除く事が出来るのだ。
この穢れを放っておいたらどうなるのか……それについてはキュゥべぇは何も言わない。
しかしそれでもまどかもマミも気にしなかった、勿論ほむらも。
彼女達の目的はただ一つ…近いうちにやってくる最悪最強の魔女『

ワルプルギスの夜』を倒す事だけだった。
そして、とうとうその日がやってきた…。

「じゃあ、行ってくるね。」

弓を構え、まどかは背を向けほむらにそう言った。
彼女の足元には動かなくなってしまったマミの死体…『ワルプルギスの夜』やられ、ソウルジェムを砕かれたのだ。
ソウルジェムを失った魔法少女の末路は『死』のみ、しかしマミもそれは重々承知の上で、この戦いに身を投じていた。
「そんな…巴さん死んじゃったのに…！」
「だからだよ。」
壊滅する街、死した友…普通の人なら絶望するだけ絶望し、生きる気力すら無くす事態をいくつも目の当りにしながらも…まどかは笑っていた。
それはある意味諦めかもしれない、『ワルプルギスの夜』を倒せるのは自分だけだという覚悟かもしれない、ほむらだけでも守るという決意かもしれない。
まどかは笑いながら振り向くと、『ほむらちゃん』と呟いた。

「あたし、あなたと友達になれて嬉しかった。今でも自慢なの、あの時…貴方を救えた事。魔法少女になれて、本当に良かったって、そう思えるんだ…。」

「嫌……いかないで…！」

「さよなら、ほむらちゃん…。」

どうして…死んでしまうとわかっていたのに…。
この町が『ワルプルギスの夜』に壊されたとしても、誰もまどかを恨んだりしないのに…。
本当は自分の命なんてどうでも良かった、彼女が生きてくれるのならば。
どうせ消えるはずだった命、ならばせめて…まどかの力になれて死ぬ……そう出来たらどんなに良かっただろう…？

だから、やり直したいと思った。

「その祈りは本当かい？」

キュゥべぇが問いかけてくる。
勿論だ、迷いなんかない。
キュゥべぇと契約すれば魔法少女になれる、どんな祈りもソウルジェムとして輝かせる事が出来る。
ならばほむらの望む願いはただ一つ。
この願いの為になら命を……いや、過去未来全ての時間軸を掛けてもいい。

その願いとは……、

「私、鹿目さんとの出会いをやり直したい…。彼女に守られる私じゃなくて、彼女を守れる私になりたい！！」

こうして、暁美ほむらは魔法少女の力を手に入れた。
その力とは『時間干渉』
この力により、彼女は過去の自分に今の自分を上書きする＝過去に遡ることに成功。
今度は魔法少女として、まどかとマミに接触、協力した。
その強力な力ゆえに、彼女は前線では大活躍……と、言いたいが実際にはやはり守られてばかり。
しかし今度は自分も戦える…一緒に『ワルプルギスの夜』を倒せる。
そして……彼女の望み通り、彼女達はとうとう『ワルプルギスの夜』を倒す事に成功した。
成功した…はずだった。

その瞬間、まどかのソウルジェムが突然グリーフシードへと変わり果ててしまったのだ。

これが『穢れ』を取り除かなかった結末。
最悪の魔女を倒すには、最大の力を使わなければならない。
まどかは、その為に再び犠牲になったのだ。

『魔法少女が魔女を生む』

その答えを知ってしまったほむらは再び過去へと遡り、今度こそまどかを救おうと尽力。
しかし、その次もダメ。
次も、次も次も次も次も。
全部失敗、どれも最終的な結末は『まどかの魔女化』
まどかから生まれた魔女はキュゥべぇ曰く『ワルプルギスの夜』を遥かに凌駕する存在らしい。
その力は、歴戦の魔法少女達が何人も命を散らしようやく倒した『ワルプルギスの夜』を一撃で葬りさるほど。
悩んだ末、ほむらはいくつ目かの時間で出会ったまどかの言葉を思い出す。

『キュゥべぇに騙される前の…バカなあたしを助けて…。』

そうだ、簡単な事だった。
『まどかが魔法少女になる前に『ワルプルギスの夜』を倒せばいい』
そうしてほむらは今までの甘い自分を捨て、非常になりきり、まどかを罵倒してまで彼女を守り続けた。
マミが命を落とし、仲間の魔法少女である美樹さやかが魔女に堕ち、それを救う為に佐倉杏子が犠牲となり……それでもほむらは戦い続けた。
単独で『ワルプルギスの夜』に挑み、圧倒的実力の差を思い知らされ、彼女のソウルジェムがグリーフシードに堕ちかけたその時……、

「もういいんだよ、ほむらちゃん。」

まどかだった。
この時間の彼女は魔法少女ではなく、普通の中学2年生の女の子。
しかしそれでも魔法少女の戦いを近くで見続けていた彼女の眼には覚悟があった。
ほむらが何度も時間を逆行し、自分を救ってくれていると知ったまどか。
そのほむらの為に、彼女はキュゥべぇに願った。

『全ての宇宙、過去、未来全ての時間の全ての魔女を、生まれる前に消し去りたい』

「そんな祈りが叶うとしたら、それは奇跡なんてレベルじゃない！！因果律そのものにたいする反逆だ！！まどか、君は本当に神様になろうとしてるのかい！？」
「神様でも何でもいい！！だから、これまで希望を信じてきたみんなを泣かせたくない、最後まで笑顔でいてほしい…。それを邪魔するルールなんて…壊してやる、変えてやる！それが私の願い！！さぁ、叶えてよ…インキュベーダー！！！！！」

その願いは、宇宙そのものを救う願いだった。
勿論、まどか程強力な素質を持った者ならばそれは可能…しかし、これを行う事で彼女の人生には『始まり』も『終わり』も無くなってしまった。

それはつまり、『この宇宙からの追放』
彼女の存在は『存在』よりも上の『概念』というものに成り果ててしまい、『鹿目まどか』という『概念』を認識できるものはただ一人としていなくなってしまう。

いや、1人だけいる。

暁美ほむらだ。
まどかは消える寸前に、ほむらに言い残した。

『あなたは私の最高の友達』

その言葉と共に自身のリボンをほむらに託すと、まどかの姿は徐々に消えてきた。
彼女曰く、『皆を迎えに行く』そうだ。
これから彼女は魔女に成り果てた全ての魔法少女達を救いにいくのだろう。

『じゃあねほむらちゃん、いつか…またもう一度会えるから…。』
「嫌……いかないで…まどか…！」

そうして消えていく鹿目まどか。
『概念』という名の『神』になった彼女は、この宇宙とはまた別の空間へと……その姿を消していった。

「まどかぁあああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！」

それから三年後…天の川学園高校二年Ｂ組

ほむらはいつも通り、窓の外から景色を眺めていた。
窓の外では丁度三年生が体育の時間でマラソンをやっており、ほむらの仲間である巴マミも同学年である風城美羽と共に並んで走っている。
まどかが全ての魔女の存在を『無かった』事にした為、本来魔女に殺されたはずのマミもこうして生きている。
同じ様に魔女となった美樹さやかを助けようとした佐倉杏子も生きており、この学園に通っているがクラスは別。
しかし、そのさやかの姿はどこにもない…。
たとえ魔女が出現しなくなったこの世界でも、人の世の恨みや闇が消えるはずはない。
それを付け狙い、今度は『魔獣』というものが出現しだした。
さらにそれに合わせて、最近ではまた別の『闇』の存在が確認され

ている。
少し離れた席に座る歌星賢吾と城島ユウキがそれについて調べているそうだが、ほむらには関係ない。
彼女の標的は『魔獣』…これが今の魔法少女達の駆除対象。
魔女とは違い、魔法少女達が堕落してなる存在ではなく、あくまで別個の存在。
まどかのおかげなのか、ソウルジェムが黒く染まっても彼女達は魔女にはならず、そのまま消滅するのみ。
この当たり前の様な風景が、鹿目まどかによってもたらされたものだとは誰も知らない、いや……『知ることができない』
これを知っているのはほむらだけ、マミにも杏子にもわかるはずが無い、もちろんキュゥべぇにも。

「はーい、今日はみんなに転校生を紹介しまーす！」

友達はいらない、いれば、その子は魔獣の標的にされる。
だから友達は作らない……ずっとそれでいいと思ってた、そうでなければならないと思っていた。
あの男と出会うまでは……、

「俺は如月弦太朗！！俺の夢はこの学園の連中全員と友達になる事だ！！よろしくな！！」

（……暑苦しい男…バカみたい…。）

如月弦太朗と暁美ほむら。
仮面ライダーフォーゼと魔法少女。
ソディアーツと魔獣。
そして、スイッチとソウルジェム。

これは、如月弦太朗と暁美ほむら、そして仮面ライダー部と魔法少女達が繰り広げるハイスクールストーリーである。

第０話　私の最初で最後の友達

第０話　私の最初で最後の友達（後書き）

ショートコント・弦太朗のフォーゼマギカに対する感想

弦太朗「宇宙キターーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！！！！」

ほむら「うるさい！！冒頭から騒がない！！」

賢吾「如月、ようやく本編に出してもらえて嬉しいのはわかるがもう少し落ち着け。」

弦太朗「っしゃあ！！この小説で友達１００人作るぜ！！」

ほむら「それ以前にこの小説そんなにキャラでないわよ？」

弦太朗「（ＯＡＯ）」

賢吾「………。」

ほむら「さてと…さぁ、行きましょう歌星君。」

賢吾「いやいや待て待て、如月どうする？」

ほむら「バカはほっとくに限るわ。」

賢吾（一話（厳密には０話）からこんな扱いでいいのか主人公！？）

第1話　宇宙キターーーーー!!!!

「おーい!賢吾ー!!」
「だから名前で呼ぶなと言ってるだろ!?」

弦太朗がこの天の川学園高校に転入してきて、早1か月の月日が流れた。
転校初日からとてつもなくカッコいい先輩に苛められ、謎の怪物に襲われ、それを幼馴染の城嶋ユウキと謎の黄色いロボットに乗ったこの歌星賢吾に救われ……そして…、

「宇宙キターーーーーーーーーーーーー!!!!!!!!」

『フォーゼ』に変身した。
『アストロスイッチ』と呼ばれる『コズミックエナジー』を利用した道具と専用のベルトを使い変身した宇宙の戦士は、この学園に出没するスイッチの怪物『ゾディアーツ』と戦う事に。
後に後輩である野座間友子の言葉がきっかけで弦太朗はこの学園をゾディアーツから守るための部活『仮面ライダー部』を設立し、現在に至る。
今では部員も増え、創設者の弦太朗、部長の風城美羽、部員第1号のユウキに加え、学園のキング『大文字隼』や、情報通の後輩『JK』、それとオカルト系の友子に賢吾と、中々愉快で個性的なメンバーが集まった。
ちなみに部室はライダー部設立よりもだいぶ前から賢吾が利用している『ラビットハッチ』と呼ばれる場所を利用しており、普段は使

われていない倉庫のロッカーの中にアストロスイッチを使って生まれた空間を通り、月面に聳え立つこの場所にやってきている。
それとこの場所の所有者（？）であるはずの賢吾は『仮面ライダー部』を認めていない。
だがいくら否定しても弦太朗が引く訳が無いので、最近ではあまりそういう事を言わない。
彼らは今まさに、その仮面ライダー部の部室に行こうとしているところなのだ。
教室を出ようとする2人…すると弦太朗がある事に気付く。

「あれ？」

「どうした如月？」
「なぁ、あいつって…？」
「あいつ？…あぁ、暁美か。」
弦太朗が指差したのは同じクラスの少女、暁美ほむら。
彼女はいつも1人で本ばかり読んでおり、誰かと口を聞いているところなど見た事が無い。
放課後になっても教室で1人本を読んでいるほむら……『この学園の連中全員と友達になる事』を目指す弦太朗にとって、それはゆゆしき問題だった。
友達の友達は皆友達……それなのにクラスに孤立している存在がいる……と、なればするべき行動はただ一つ。

「賢吾！！！先に行っててくれ！！！」

「は？いや…お前何するつもりだ？」
「決まってんだろ！！あの暁美って奴と友達になってくる！！」
「いやいやいやいや待て待て待て待て！？放課後は新しいスイッチの試験をすると言っただろう！そんなの明日の朝にやれ！！」
「い～やダメだ！！俺はこの学園の連中全員と一刻も早く友達にならねぇといけねぇんだよ！！」
「何故だ！？」
「俺だからだ！！」
「いや意味わからない！！」
相変わらず弦太朗は時々わけのわからない事を言う…。
それに今まで付き合ってきたユウキの屈強さが痛いほどわかる、そんな歌星賢吾高校2年生の秋である。
ここで彼と揉めても全く得しないので、仕方なく賢吾は先にラビットハッチへと向かって行った。
賢吾が去っていくと、弦太朗は短すぎる学ランを羽織り直し、微妙なリーゼントを整えながらほむらの下へ。
ほむらが読んでいた本を覗き込みながら、彼は彼女に笑顔で話しかけた。

「何読んでんだ？」
「貴方には関係の無い物よ。」
「……。」

即答だった。
あまりにも即答すぎて何も言い返せない…弦太朗は実はかなりの口下手だったりする。
しかしそれでも彼は負けない……『友達マイスター（今命名）』の誇りに掛けて…！！

「それ面白いか？」
「えぇ、貴方と話しているよりずっと。」
「どういう本なんだ？」
「貴方とは一生無縁の本よ。」
「分厚いな？読むの辛くね？」
「私にとって貴方と話す方が辛いわ。」
「もしかして俺の事嫌い？」
「そうね、どちらかと言えば。」

今までに無い程の攻防戦……これはゾディアーツとの戦闘並みにスリルがある。
それでも弦太朗は負けない…否、負けたくない。
ここで負けては漢がすたる、以前に大文字や美羽に言われ通り、ただの『トラッシュ』だ。
だからこそ彼は立ち上がり、いつもの様に胸お何度か叩きほむらに手を向けた。

「俺は如月弦太朗！！この学園の連中全員と友達になる男だ！！暁美、お前ともぜってぇ友達になってやるからな！！」

ガタっ！！

弦太朗がそう言った瞬間、急にほむらが立ち上がった。
何事かと思い彼女の顔を見る弦太朗……その表情を見て、弦太朗はハッとしてしまった。

泣いている。

わんわん泣く…というか、涙だけを流しているという感じ。
彼女は弦太朗の胸蔵を掴むと、信じられないほど強い力で彼を教室の外へと放り投げた。
そして壁に叩きつけ、怒りの形相で彼に向かって呟く。
「二度と…、」
「え……え…？」

「二度と私に向かって……『友達』なんて言葉口にしないで…！！！」

それだけ言うと、ほむらは荷物を纏めて逃げるように帰って行った。
一体自分が何をしたのだろう……弦太朗はこの時、彼女の心の核心に触れてしまった事に全く気付かず、腑に落ちないまま彼も仮面ライダー部の部室へと向かって行った。

学園から５００ｍ程離れたマンションのとある一室

そこは天の川学園高校３年生である、巴マミの自宅だった。
彼女は４年ほど前に両親を事故で無くし、遠い親戚しかおらず身寄りもない。
だから中学生の時からここで１人暮らしを始め、アルバイトをしながら学校生活をそれなりに満喫している。

1年生の時から仲が良かった風城美羽は最近、チア部以外の謎の部活に入り鐚になっている為放課後はほとんど会っていない。
だから最近では自宅に直帰で、アルバイトがある日以外はここで勉強している。

主に3人で。

「お邪魔するわ。」
「あらほむらさん、いらっしゃい。」
「よう、ほむら！今日は早いな？」
一緒にいるのは同じ学年で別クラスの佐倉杏子。
一応マミから勉強を教えてもらうという口実で来ているのだが…来たらだいたい食うか寝るかしかしておらず、教科書なんか開いた試しが無い。
それでも学年末は基本的には１０位以内に入るので、勉強は相当できる方だ。
「杏子、あなた勉強しないんなら帰ったらどうなの？」
「帰るっつってもあたしん家、この部屋の隣だもん。」
「杏子さん、実はここ最近毎日夜遅くまでいるのよ……おかげで夕飯作るのが楽しくてしょうがないわ♪」
「マミさん、そいつに付き合ってるとそのうち『太り』ますよ？」
「杏子さん、今すぐ帰ってくれるかしら？」
「ほむらてめぇ！！」
クスクスと笑いながら、自分も鞄を置いてマミと杏子の隣に座るほむら。
ここ3年間、毎日のように繰り返している日常だ。
はたから見れば彼女らはきっと『友達』に見えるのだろう。
だが、実際には違う。

彼女達は『同志』なのだ。

同じ秘密を共有し、同じ悩みを持ち、同じ目的の為に生きる『同志』。

だからこそほむらも彼女達と一緒にいられる。

彼女の友達はあくまでも1人だけ……。

『鹿目まどか』

それは誰も知らない、暁美ほむらだけの最初で最後の友達。

彼女の事を想うと、今でも胸が痛くなる。

だからこそ、ほむらは友達なんか作らない。

友達なんか作っても……結局最後には悲しい別れが待っているのだから……。

仮面ライダー部

「それは君が悪い。」

「えぇ～？何でだよ隼～？」

部室に着くなり先ほどのほむらとのやり取りの事を他の部員に相談してみた弦太朗。

それを聞くなり我らが大文字先輩が立ち上がり、弦太朗を叱り始めた。

何気に真面目に怒っている時の大文字は中々圧巻で、弦太朗も肩を小さくせざるを得ない。
「君はレディに対して無粋すぎるんだ。いいか？レディというのは…例えるならばそう！！まるでソフトクリームの様に柔らかく繊細で、それでいて儚い…。君の『友達になりたい』という気持ちもいいが、ここはレディファースト、女性に対してはソフトで……そしてあまk、」
「はいはいわかりましたわかりましたからそろそろアンタはすっこんでなさい隼。」
「なっ、み、美羽…まだ僕は言いたい事の５％も言い切っては…、」
「アンタ話すと長いんだからいいの。弦太朗にはスイッチの試験があるんだからそんなに長く話なんかしてられないでしょ？」
正論で何も言い返せないキング（笑）
しかしながら大文字の言葉で弦太朗も多少は反省したのか、かなり落ち込んでいる。
そんな彼を元気づけようと後輩のＪＫと友子がそれぞれエロ本となにやら意味不明な十字架（どこかのＩＸＡのマークっぽい物）を差し出しているが、そこは美羽に止められた。
「でもさ弦ちゃん、あの暁美さんって……結構変な噂立ってるよ？」
「噂？」
そう言ってきたのは幼馴染であるユウキ。
彼女も友達から聞いた話だけど、と少し濁しながら、暁美ほむらという生徒について語り始めた。

「何でもあの子、夜な夜なこの辺を変なコスプレして出歩いているんだって！それで白い猫みたなの引き連れて…それでいきなり、『魔獣の気配がする……ッ！』…とか言い出しちゃうんだって！その直後に姿が消えたり、宙に浮かんだり……あーもう！言ってるこっちが怖くなってきちゃったよー！」

「ま…ママママジか…！？そそそりゃ、そりゃりゃりゃや、ヤベェなぁ…。」
「その話……もっと詳しく聞きたい…かも……。」
「え？うぎゃーーーー！！！！！」
ビビっているユウキに追い打ちをかける（おもに上から）友子。
ただでさえオカルト＆ユウキ好きな彼女…おそらくユウキは当分開放してもらえないだろう。
情報通のＪｋも知らない情報なので、彼も是非とも話が聞きたいとユウキにすがった。
その様子を今まで見ていた賢吾……彼ははぁ、とため息をつくと席を立ち、いまだにガタガタ震えている弦太朗の肩をポンッと叩いた。
「彼女が気になるのか如月？」
「あ？……あぁ、まぁな…。『友達』って言ってた時のあいつの顔…なんかすっげぇ寂しそうだった…。」
「……ってこい…。」
「え？」

「行って来い、如月。」

「行って来いって…え？賢吾？」
「君がそんな調子じゃ、スイッチの試験もうまくいくはずが無い。今回検証する予定だったこの『マグネットスイッチ』はまだ何もか

もが不明な謎のスイッチなんだ。そんな危険な物を、精神不安定なお前に渡してフォーゼドライバーを壊されちゃ堪らないからな。さっさと暁美に謝るか何かして、早く戻って来い。」
「賢吾……うおぉおおお！！！！やっぱりお前俺の親友だぁぁぁぁぁ！！！！！」
「なっ！？だ、だから！！俺は君とは親友になった覚えは無いし、そもそもまだ友達になったとも言っていない！！」
「照れるな照れるな♪っしゃあ！！じゃあちょっくら行ってくるぜ！！！」
早速荷物を纏め、部室を出ていく弦太朗。
そう言えば、さっきほむらが教室に読んでいた本を忘れてたなと思いだし、弦太朗は一度教室へと向かっていた。

「！！……マミさん、杏子…！！」
「あぁ、わかってる。」
「『魔獣』の気配ね。」
マミの部屋で勉強をするどころか何故かチーズケーキを食べていた3人は同時に同じ気配に気づくと、全員で部屋を出た。
『魔獣』……それは、彼女達が戦うべき敵。
古来より存在する厄災の種であり、同時に彼女達『魔法少女』が戦うべき敵。
奴らは人に隠れて生き、人々の魂を喰らい続ける。
そうなる前に倒す……それこそが魔法少女の目的だ。

『皆、用意はいいかい？』

「あら淫獣、いたの？」
『相変わらず君は口が悪いねほむら。』
巴家の玄関先でスタンバっていた白い猫の様な生物。
それこそが魔法少女の生みの親とも言える存在、『キュゥべぇ』
真の名を『インキュベーター』ともいい、簡単に言えば『宇宙人』
だ。
魔法少女は全て彼と契約してから生まれる、彼曰く自分がいなけれ
ば人類はとっくに滅亡しているか未だに洞穴暮らしで野生の動物を
狩って生きていただろうとの事。
可愛い外見とは裏腹に信用できない胡散臭い奴だが、それでも彼女
達とは3年間ずっと一緒に戦い続けてきた仲だ。
キュゥべぇと共に3人は『魔獣』の気配がする場所……『天の川学
園高校2年B組の教室』へと向かった。

「何だ……こりゃ……？」
教室に入るや否や、弦太朗は信じられないものを目撃した。
何故か机や椅子が宙に浮いており、更に教室の中に階段があったり、
今彼が入ってきたはずの入り口が無くなってたりしている…。
しかも極めつけがコレ。

『オ……オォォォォ……ッ…！』
『ウォ……ウエェェェェイ…ガラミゾ…！！』

『ウゴォ…ゴデ…グッデモイイガナ……？』

白いマントに身を包んだ身長５ｍ近い男達。
常識で考えて普通の高校の教室の大きさに収まる様なサイズではなく…しかもところどころから一匹ずつ『生えてきてる』
気持ち悪いにも程がある……どうなってるんだろうこれは…？
「何だこいつら…？スイッチの化けもんでもねぇ！？」
『ウゴォ……ザ、ザヨゴォォォォォォ…！！！』
「うわっ！？」
何と、一匹が舌を伸ばし、弦太朗を攻撃してきた。
彼はそれを何とかかわすが、次から次へと怪物たちは襲ってくる。
何がなんだかさっぱりわからない……彼が鞄の中に手を突っ込んだ
その時だった……、

「ティロ・フィナーレ！！」

ドカンッ！！！！

『ウオォォォォォォン…！！』

『オデノカダダダボドボドダァー……！！』

何と、いきなり弦太朗の後ろから巨大な大砲が放たれ、怪物を数匹纏めて消し去った。

彼が思わず振り返ると、そこには3人の変な格好の少女が。

1人はイギリスとフランスの洋服を足して割ったような恰好にベレー帽を被ったマスケット銃の少女。

もう1人は赤い騎士の様な服に長いランスを持った少女。

そしてもう一人は……、

「あ、暁美……？」

「！？……き、如月君……？」

何と、暁美ほむら。

先ほどまでの制服とは違い、黒い服に小さい丸い盾を装備していた。

赤い服の少女がほむらの肩を叩いて聞いてくる。

「何だお前？知り合いか？」

「え……えぇ、一応、クラスメイト……。」

「あらそうなの？なら、しっかり守ってあげないといけないわね♪」

そう言うと2人の少女…マミと杏子は弦太朗の前に立った。

迫りくる怪物…『魔獣』を薙ぎ払っていく2人。

ほむらも弦太朗に早く逃げるように促しながら、彼女の武器である弓矢を構える。

だが……、

「……女にばっか……守られるわけにもいかねぇよな……。」

「何を言ってるの！？早く逃げなさい！！…って、それは…！？」
魔獣からの攻撃を盾で防いでいたほむらが気付いたもの…それは弦太朗の腰のベルト。
大きいバックルに４つのスイッチが嵌め込まれており、彼はほむらの前に立ちながらベルトのスイッチを右から順に一つずつ入れていく。
「き、如月君…貴方なにを…！？」
「何だがよくわかんねぇけど……こいつら片づければいいんだな！！」

『3…、』

スイッチを全部入れると、続いてベルトからカウントが始まった。
徐々に手を胸の辺りに近づきながら、弦太朗はベルトについているレバーを握る。

『2…、』

「おぅ暁美、危ないからちょっと下がってろ！」
「何を言ってるの！？危なくて下がるのはあなたの……！？」

『1…、』

「変身ッッ！！！！！」

その叫びと共に弦太朗は勢いよくレバーを入れ、腕を天に突き上げた。
すると彼の体を白い光が包み込み…どうじにロケットの発射の時の様な激しい噴射が辺りに巻き起こる。
それに耐えきれずに吹っ飛ばされるほむら…その次に彼女が見たものは…、

「あ……あれは……！？」

「宇宙…キターーーーーーーーーーーーッ！！！！！！！！！！」

ロケットの様な頭部に宇宙飛行士の様なボディ。
『仮面ライダーフォーゼ』が、魔法少女と魔獣に初めて邂逅した瞬間だった。

第1話　宇宙キターーーーー！！！！

第1話　宇宙キターーーー！！！！（後書き）

ショートコント：巴家の食糧事情

1日目

マミ「今日の夕飯、何にしようかしら…？」
杏子「あたし鍋食いたい！」
マミ「お鍋ねぇ…いいかもしれないわね。そうだ、ほむらさんも呼びましょう！」

2日目

マミ「さてと、それじゃお夕飯の買い物して行こうかしら？」
杏子「今日はあっさりしたもの食いたいな…そうだ、パスタなんてどうだ？ボンゴレパスタ！」
マミ「あらいいわね！」

3日目

杏子「今日はおでんにしようぜ！」
マミ「いいわねぇおでん！」

4日目

杏子「カレー食いたいなー…。」
マミ「はいはいカレーね。」

5日目

マミ「今日は焼き魚にしようかしら？」
杏子「た・い！た・い！た・い！！」
マミ「鯛かぁ…ならお刺身の方がいいかも？」

6日目

杏子「このトンカツうまーーーーー！！！」
マミ「ふふふ、よかったわお口にあって。」

7日目

ほむら「杏子、あなた勉強しないんなら帰ったらどうなの？」
杏子「帰るっつってもあたしん家、この部屋の隣だもん。」
マミ「杏子さん、実はここ最近毎日夜遅くまでいるのよ……おかげで夕飯作るのが楽しくてしょうがないわ♪」
ほむら「マミさん、そいつに付き合ってるとそのうち『太り』ますよ？」
マミ「杏子さん、今すぐ帰ってくれるかしら？」
杏子「ほむらてめぇ！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9840x/

フォーゼマギカ

2011年11月2日03時20分発行